

落雷 (ニュースと JSS 説明)

8月12日の夕刻、各報道機関が一斉に、ミシサガの北にあるブランプトンで、落雷のため子供が感電し重態・・・と言うニュースを流した。子供は地域の病院からトロントの小児病院に移され、その後のニュースでは命は取り留めた模様だ。多くのニュースを総合すると状況は以下のようなものである。

8月12日午後2時半ごろ、ブランプトンのセントニアル公園で子供と大人数人が落雷で感電し、内5才と4才の子供、26才の母親が病院に運ばれた。他に子供2人と大人1人が感電したが、病院に運ばれることはなかった。

当時、空は黒い雲で覆われていたが、降雨はなかった。感電した人たちは、天気急変を察して、サッカーグラウンドを横切って自宅に戻る途中だった。公園の周囲には樹木、高層のアパート、建設用の背の高いクレーンなどがあり、現場は落雷が予想されるような場所ではない。

落雷直後に近くの住人、自転車警官、救急隊員、消防隊員など幾人かがかけつけ、呼吸がなく、心臓の鼓動が停止した被害者たちに人工呼吸などを行って救急に努めた。

連邦環境省によれば、カナダにおける落雷による死者は年間50～60人である。なお、1994年に報告された9763件の山火事のうち5324件は、落雷によるものであったとも言う。落雷による経済損失は莫大で、1979年から1993年の

間の記録では、年間140億ドル程度となっている。

日本の警察庁によると、日本では2001～2005年の5年間で年間平均189件の落雷事故があり(特に2005年は661件と非常に多かった)、毎年18人(平均)程度の死者が出ているという。前出のカナダの統計に較べると日本の人口比死亡率は大幅に少ない。

落雷の危機に平地で遭遇してしまった場合、どのように危険を避ければいいのか。連邦環境省は、稲光と雷鳴の間隔が30秒以下になった場合、落雷の可能性があり退避活動をする必要があると言っている。一方日本の気象庁が配信しているメールマガジンでは、雷鳴が聞こえてきた時点でその場所は、いつ雷が落ちてもおかしくないテリトリーに入っているとされている。メールマガジンは、日本では、雷鳴がまだまだ遠いからといってゴルフを続けていて、落雷被害に遭うケースが後を絶たないが、毎年1000人以上がゴルフ場での落雷事故で死亡する(訳者注、この部分に関しては実態未確認)アメリカでは、雷の音が聞こえてきた時点でプレイを中止し、避難を開始するとも言っている(筆者の経験では、カナダないしはアメリカのゴルフ場は、雷接近で危険が察知されるとサイレンでプレーヤーに知らせることは確かだ)。

又同メールマガジンや幾多あるサイトによると、被害を避けるためには近くに建物があればそこへ避難するのが一番安全。屋根がついた車に逃げ込むことも推奨されている(屋根がない場合、金属の構造物はむしろ危険である)。一方、木の真下は危険であることを知っている人

は多いが、だからといってまったく何もない場所にしゃがみこむのも危険。目安は、5メートルの高さがあるかどうかで、木や、電柱、ポール、クレーンなど 5メートル以上の高さがあれば、頂点から計算して45度の保護角の中に入りしゃがむ(この場合両足の幅は狭くする)のが良いという。ただし、万一落雷した場合に飛び移る放電を浴びないために、木の幹や枝の先などからは4メートル以上離れること。又、一度雷が落ちたからといって、次に落雷があるまでに何秒かの間隔があると考えるのは間違い。次までに間があるからと走って避難するよりは、その場でしのいだ方がまだ安全だという。

周囲に何もなく、避難することも不可能な場所では、しゃがんでいる以外の非難方法はない。耳をしっかりとふさぎ、頭を抱え込むようにしてしゃがむ(前述同様両足の間は狭める)。少しでも低くなろうと寝そべるのは、近くに落雷した時に地面を雷が伝わってケガをすることがあるので危険。因みにある報道によると、ブラントンで起きた落雷被害は、グラウンドにある金属製のサッカーゴールに落ちた雷が地表を走って被害者に至ったとも言われている。